

大谷栄一・川又俊則・菊池裕生編

『構築される信念 — 宗教社会学のアクチュアリティを求めて —』

ハーベスト社，2000年10月刊，185頁，2600円

野口 生也

本書は、七人の若手宗教社会学者たちによって著された、現在の宗教研究へ新しい方法論を提示する「宗教社会学のテキスト」である。執筆者全員が、1995年に結成され5年間ほど活動した「近現代宗教研究批評の会(略称、批評の会)」のメンバーである。「批評の会」は、その名の通り過去の宗教研究業績を批評する集まりであり、主に1970年代当時の若手研究者が中心となった「宗教社会学研究会(略称、宗社研)」の研究業績を批判的に検討した。その中で、メンバーは方法論についての議論の少なさに対して、<不満>と同時に新しい方法論の<必要性>を感じた。それらの思いが本書に注ぎ込まれている。

それではまず本書の目次を挙げ、各章の内容を簡単に概観したい。その後で、意見を述べることにする。

本書は以下のように構成されている。

はじめに (大谷・川又・菊池)

イントロダクション ——本書のねらいと構成—— (執筆者一同)

第I部 信者研究のアクチュアリティ

第1章 信者とその周辺

——クリスチャンの自分史を中心に—— (川又俊則)

第2章 物語られる「わたし」(self)と体験談の分析

——真如苑「青年部弁論大会」のコンテクストに着目して—— (菊池裕生)

第II部 宗教集団研究のアクチュアリティ

第3章 近代仏教運動の布教戦略

——戦前期日本の日蓮主義運動の場合—— (大谷栄一)

第4章 現代のメディア・コミュニケーションにおける宗教的共同性

——キリスト教系メーリングリストの場合—— (黒崎浩行)

第III部 「宗教と社会」研究のアクチュアリティ

第5章 ナショナリズムとモニュメンタリズム

——英国の戦没記念碑における伝統と記憶—— (栗津賢太)

第6章 グローバル化とファンダメンタリズムの諸相

——主にイスラームを参照して—— (角田幹夫)

補章 20世紀における日本の宗教社会学

——アプローチの変遷についての鳥瞰図—— (寺田喜朗)

おわりに (大谷・川又・菊池)

本書は、研究の視点の違いから大きく4つに分けられている。それらは、個人レベルの研究(第Ⅰ部)、集団レベルの研究(第Ⅱ部)、社会レベルの研究(第Ⅲ部)、そして、日本の宗教社会学研究史(補章)である。以下に各章ごとに内容を概観する。

第1章の川又論文では、「信者がたどるライフコース上に現れる、濃淡のある『信仰グラデーション』を、緻密に描き出すアプローチ」を提示している。キリスト教の影響を受けていると言える日本社会において、「クリスチャンはどこにいるのか」という疑問から論が始まっている。これまでの研究では、教会には所属しない自称「信者」たちや一般の人々の入信過程などは注目されていなかったと述べている。著者は、そのような「信者周辺(marginal believer)」に注目している。まず、客観的な基準である「入会」と主観的な基準である「入信」に注目し、「信者」を6つに類型化している。それらは、「継続信者」、「断続信者」、「教会内信者周辺」、「教会外信者周辺」、「接触非信者」、「非接触非信者」である。事例研究では、「ライフヒストリー」の一つである「自分史」を用いて分析をしている。「自分史」は、「執筆者が自らの無数にある人生上の出来事の中で、本人が重要だと思われる出来事を自分自身で取捨選択し、それらを主観的に関連させてまとめた個人史」であると説明している。主観的な基準である「入信」を考察する際、「自分史」は資料として適していると著者は述べている。研究の目的に合う32冊の「自分史」から、執筆者の特徴をまとめ、記述を引用して、執筆者の思考を分析している。そして6つの「信者」類型を「信仰グラデーション」の中に位置付けてそれを完成させている。「自分史」から「信者周辺」の教会外での信仰生活を確保することの可能性を紹介している。

第2章の菊池論文では、新宗教教団で行われる「体験談」の分析を通して「信者個人の信念が構築されていく過程を描写するためのアプローチ」を提示している。著者は、島菌進の研究を評価し、「体験談」とは「信仰をめぐる体験の物語」と定義し、それは、信者の「<現実>世界を構成・維持する行為としての第一次的な分析の対象」となりうるとしている。まず、「物語(narrative)」は、「物語行為(speech act)」によって初めて<意味>を持つようになると述べている。また、「物語」は書き換えが可能ではあるが、「物語の聞き手たる他者の存在」などの「コンテキスト(context)」が影響すると述べている。そして、自分自身について語る「物語」を「自己物語(self-narrative)」とするならば、「体験談」もその一つであるとしている。つまり、信仰の体験は物語られることにより、体験自体を<現実>とすることができるとしている。著者は、島菌の「体験談」についての概念を評価するが、島菌の分析は、完成された「体験談」の効果に注目しているため、完成するまでの過程についての考察はされていないとしている。また、著者は、新屋重彦の研究は、「物語の構造への着目」をしているが、「自己物語」の「非一貫性」だけを人々の苦難や不幸の原因であるとしているため、分析の幅を狭くしていると述べている。「体験談」は、「様々な関係性の他者との相互行為の中、やはり様々な場所や時間の中で構成されていく自己物語である」としている。それゆえ、「コンテキスト」への着目が重要となると述べている。事例研究では、「真如苑『青年部弁論大会』」を考察している。語り手である「弁士」が、他者との相互行為の中でどのように「自己物語」を再編・維持し、それに「コンテキスト」がどう関るかを見ている。

第3章の大谷論文では、「宗教運動が構築されていく過程を分析するためのアプローチ」を提示している。そのために、「宗教集団の布教活動の分析を通じて、宗教集団が自らの集合的アイデ

ンティティを形成しながら、宗教運動を社会的に構築していく過程を検討」と述べている。まず、森岡清美と西山茂の宗教運動論を批評し、「教団を実体論的に把握するのではなく、成員と非成員との社会関係において把握し、宗教運動が社会的に構築されていく過程を分析する構築主義的な研究視座」を提示している。また、対馬路人の布教研究に対して、布教の「意味づけ作業 (signifying work)」に注目すべきだとしている。そして社会運動論の研究成果に触れ、「意味づけ作業」という意味の「フレーミング (framing)」とそれによる結果の「集合行為フレーム (collective action frame)」を紹介している。著者は、教団の布教戦略としての「フレーミング」と布教対象者の「フレーミング」が「共鳴」することによって、「動員が成功し運動が構築されていく」としている。事例研究として、「田中智学 (1861~1939) によって創始された日蓮系の在家仏教教団・国柱会の日蓮主義運動」を取り上げている。まず、その「布教活動の歴史の変遷」を概観し、二つのキャンペーンを分析している。一つは、「宗門革命・祖道復古」という「フレーミング」で信徒らの動員に成功した「1890年代 (明治中期) の日蓮宗門改革運動」である。もう一つは、「国体観念の自覚」という「フレーミング」で国民の動員を意図したが失敗した「1910年初頭 (明治末期) の国体擁護大演説」である。

第4章の黒崎論文では、「現代のメディア・コミュニケーションにおける宗教的共同性の構築過程を分析するアプローチ」を提示している。まず、著者はアンソニー・ギデンズの「脱埋め込み」と「再埋め込み」の概念を挙げ、「時間・空間を越えたメディア・コミュニケーション」がもたらす現象を説明している。それは、「『いま・ここ』に生まれる人間関係が権威や信頼を勝ち得るには、いったんその『いま・ここ』の文脈から引きはがして、いつでも、どこでも通用する関係に置き換え可能であることを示さなければならない」ことだとまとめている。また、これまで宗教研究においてメディア研究が消極的であったことを見直す形で、「CMC (Computer-Mediated-Communication)」の調査は「現地調査」であるとし、その研究の意義を述べている。それと同時に、「CMC」は、新しい分野であるため「多角的な調査」の必要性和「インフォームド・コンセント」の問題が指摘されている。「CMC」における相互行為の研究方法として、ノーマン・デンジンが採った「会話分析」による「質的な調査方法」を評価している。そして、「双方向的であるというだけでなく、主体的な選択・意志決定や自己説明が不可欠であるようなコミュニケーション環境において、ひとびとはいかにして宗教集団への『参加』を達成するか」という問いを「アメリカのキリスト教系メーリングリスト」を事例として考察している。ここでは、意外に「時間に制限された、同時的なコミュニケーション」、「日常生活の私的な話題」、「現実生活と同等のコミットメント」が観察されると分析している。

第5章の粟津論文では、「ナショナリズムのもつ『死』の解釈がいかに構築されてきたか」を分析する「社会史的なアプローチ」を提示している。まず、「近代国家における象徴や儀礼についての研究」などのマクロな研究は、本来宗教社会学が扱うべきだと主張している。その立場から、「ナショナリズムという現代社会における宗教的次元を、多層的な国民文化の研究として宗教社会学の考察の射程に入れる必要性和可能性を探」ろうとしている。著者は、従来の世俗化論を概観し、世俗国家の「宗教的機能」が重視されていなかった点を指摘し、その例としてナショナリズムの「文化的側面」を挙げている。ナショナリズム研究の問題として、「産業社会に適したイデオロギーであるとする近代主義的解釈」と「ナショナリズムの文化的側面に着目した解釈」を挙げて

いる。著者は、「ナショナリズムによる死の正当化」は後者の解釈で説明すべきだとしている。事例として「英国における戦没記念碑 (War Memorial)」を取り上げている。その際、モーリス・アルヴァックスによる集団社会が持つ「集合的記憶 (memoire collective)」の理論を用いている。

第6章の角田論文では、「現代世界において生起しているファンダメンタリズム現象を把握するためのアプローチ」を提示している。まず、著者はファンダメンタリズムを「ある文化的伝統において、そのアイデンティティの構成にとって本質的であると見なされるもの (fundamentals)」を設定し、そこへの回帰という名目でその伝統を純化し、内的なものであれ外的なものであれその fundamentals を脅かすものを排除するという仕方、その文化的伝統を改革せんとし、それを実現するためには、政治や社会倫理への（時には暴力的な）介入を行おうとする傾向であると定義している。本章では、「近代 (化)」と「グローバル化」において、ファンダメンタリズムの「宗教的応答」を考察しようとしている。また、「システム論的視点」、「現象学的視点」、「世界システム論」などの社会学的な方法や理論を用い、「近代 (化) がもたらすコンティンジェンシーの増大への意味論的応答という問題」を見直そうとしている。事例では、「世俗的ナショナリズム」と「宗教的ファンダメンタリズム」の関係が確認できるエジプトを紹介している。

補章の寺田論文では、「20 世紀日本の宗教社会学の展開を、研究対象に対するアプローチの変遷に焦点を当て、5つの時期に分けた上で、その鳥瞰図を描き出すこと」を目標としている。以下がその5つの時期であり、それぞれを概観する。

第1期 宗教社会学説の輸入・紹介 (1900～1935 年)

第2期 家・同族団理論と機能主義による実証研究 (1935～1960 年)

第3期 世俗化論と構造機能主義による社会変動へのまなざし (1960～1975 年)

第4期 内在的理解と教団類型論による新宗教へのまなざし (1975～1990 年)

第5期 構築主義による宗教現象の構築過程へのまなざし (1990～2000 年)

第1期は、「日本の宗教社会学の黎明期」であるとしている。1898年に姉崎正治が「宗教社会学」という用語を日本で最初に用いたと述べている。大正期には、赤松智城によるデュルケムの紹介を筆頭にフランスの宗教社会学が紹介され、少し遅れて、岡田謙や小口偉一によってジンメルやヴェーバーのドイツの宗教社会学が紹介されたと概説している。この期間に宗教に関する諸学説が体系化されたとしている。

第2期は、「日本社会をフィールドにした実証的な社会学的宗教研究が開始され」た時期だとしている。戦後、伝統的な村落社会や宗教集団への「intensive な局地研究」が盛んになったと述べている。また、農村社会学の鈴木栄太郎や有賀喜左衛門による「家・同族団理論」と、「欧米の機能主義人類学」の影響を受けた森岡清美による研究が日本の宗教社会学を準備したとしている。

第3期は、「世俗化論や構造機能主義などの新たな欧米理論が輸入・紹介され、調査方法として、質問紙を用いた統計的手法が導入され」た時期だとしている。「宗教学の実証性・科学性を強く主張した」岸本英夫の門下生である柳川啓一や安斎伸らが積極的に欧米の理論を導入したと述べている。また、この時期の日本社会の急激な変動に応じて、新宗教の研究が始まり、世俗化論の見直しもなされたと述べている。

第4期は、「宗教社会学研究会 (1975～1990 年、以下、宗社研) の活動によって、宗教社会学研究が大いに活性化された時期」とされている。「宗社研」が、「宗教の機能から意味の領域へ」と

研究関心を移行させ、「内在的理解」というアプローチを提示したと述べている。その中から新宗教の教祖研究や教えの研究が盛んになり、日本独自の教団類型論も提案されたと述べている。

第5期は、本書の執筆者たちが含まれる「ポスト宗社研」の時期であるとしている。そしてこの期間の新しい流れとして、島藺進の「新靈性運動」論を始めとした「宗教の脱制度化的状況を見据えた宗教の社会形態の変容を探った研究」と、「行為者の意味付与・解釈と諸行為者間の相互行為 (interaction) の過程から宗教現象を捉え返すことを企図した研究」を挙げている。そして、それらの研究から「現在では宗教現象を非実体的に捉え、多元的な意味世界の構築過程を記述・分析する構築主義的アプローチが導入されるに至っている」としている。

以上、各章を概観してみた。各章ごとの細かい議論に対する批評は紙数の関係で割愛せざるを得ないので、本書全体について述べてみたい。

本書では、これまで「宗教研究のアプローチに関する議論は不十分であった」という〈不満〉から、「新たなアプローチの提示」を目的とした議論を各執筆者が展開している。その点では、本書はまとまりをもっていると言えよう。最初の六つの章では、はじめに方法論の議論をし、その後事例研究を載せるという読者にとってわかりやすい構成になっている。また、「註」が豊富であり、キーワードとなる用語を各章の終わりに「用語解説」として置くなど、「テキスト」としての工夫が伺える。しかし、第Ⅲ部などでは、社会的用語が多くやや難解な議論になっているのが残念である。

また、本書は、宗教現象を「個人・集団・社会の各レベルが相互に影響し合うことで、われわれにとって意味ある現象として構築される現象である」とし、その「構築過程の分析という共通の主題」によって各章が書かれているとしている。第Ⅲ部の二つの章に関しては、「社会」という大きな枠での議論であるためか、他の章と比べて、議論の多くが社会学の概念や理論についてであり、具体的なアプローチが提示できていない。しかしながら、第Ⅲ部は、本来の宗教社会学の対象である「社会」をどう扱うかを問うている点で、本書には欠かせない重要な議論である。

補章においては、本書の執筆者たちの研究を含む最近の流れとして「構築主義的アプローチ」が以下のように説明されている。

「構築主義的アプローチの特色は、宗教的意味の問題を個人の主観や諸個人間の間主観において立ち現れる問題として捉えている点にある。また、諸個人が取り結ぶ相互行為過程から信仰の場面は構築され、信者は他者との関係において社会的に存在しているという、非実体論で関係論的な視点が前提とされている。さらに信者の動機や体験談の表出は、信者の意味付与や解釈をめぐる相互行為の場面に帰属し、その信者が属するコンテクストにしたがってさまざまなヴァージョンを持ちうる、という認識が共有されている。」

ここでは、「日本の宗教社会学の展開」において、これらの特色がどのように、また何によって現れてきたのかが、十分に語られてはいない。はたして「構築主義的アプローチ」は、全てのレベルの宗教現象に、または日本の宗教現象に妥当なのか、が十分に議論がされていない。また、もし、その議論がなされるならば、それは本書の「主題」に関するものであるから、本章の最初の部分に置かれるべきものであろう。

本書における方法論へのこだわりは、本書の目的でもあるし、執筆者のほとんどが〈社会学〉の研究者であることから当然であると言える。しかしながら、宗教を研究する上で方法論より

も宗教の理解を重視する<宗教学>の立場も忘れてはならないだろう。もちろん、本書は決してその立場を無視してはいない。むしろ、本書の執筆動機である<不満>は、いままでの偏りすぎた<宗教学的な宗教研究>に当てられたものである。その意味で、本書は、宗教研究における<社会学>と<宗教学>を橋渡しする一冊と言えよう。